

〈総説〉

遂行機能障害、記憶障害の認知リハビリテーション
における学習理論の役割

——馴化型・予測型・制御型学習の困難を例として——*

坂爪 一幸¹⁾

〔認知リハビリテーション 3(2)：2～13, 1998〕

I. はじめに

認知リハビリテーションは治療対象とする認知機能障害を分析し、障害部分を同定し、治療介入を実施することからなる。

認知機能がいくつかの下位の構成モジュール(要素的構成部分)あるいは機能系からなる場合、どの構成モジュールに障害が存在するかを分析して解明することが必要である。当該機能が正常に機能しない原因となっている構成モジュールに対して、治療介入を施すことになる。治療介入は一般的には、障害された構成モジュールの直接的および反復的使用による回復訓練、または他の構成モジュールを介した代償訓練がおこなわれる。

このように障害機能を下位の障害モジュールに還元し直接的に治療介入するのを“微視的”治療アプローチとすれば、病棟生活や日常生活のなかで、全体的な適応行動の増加と問題行動の発生の予防と減少を目的にした“巨視的”治療アプローチも考えられる。

いずれの治療アプローチを実施するにしても、そこには対環境および対人間(治療者や家族など)との相互作用が基本的に存在する。この相互作用による患者の認知構造や行動の変化には、学習というあらゆる生物に共通した機序が関与してくる。

本論ではリハビリテーションにおける学習理論

の役割を、記憶障害や遂行機能障害を例にして、リハビリ治療場面や日常生活場面でのより“巨視的”治療アプローチの視点から考えてみる。これらは当然“微視的”治療アプローチや他の障害にも適用可能なものである。

II. 有機体の適応形態と学習形態

1. 有機体と環境の相互作用と学習

有機体は環境のなかで生命を営んでいる。有機体を取り巻く環境に変化が全くない場合、エネルギー効率の点からは最適な適応形態は何も行動しない、ということであろう。

しかし実際には、有機体を取り巻く環境は時々刻々変化している。有機体は変化する環境と絶え間なく相互作用を繰り返して生存し生活している。環境との原型的な相互作用は、生体を維持するために栄養物に対して接近し捕食行動を起こし、自己保存のために危険に対して逃避一回避行動をおこなう、ということになる。

有機体が環境と相互に作用して適応していく際に、三種の異なる基本的な適応形態が存在する。ひとつは環境内に、ある特性を有する特定の事象が単独で生起する場合の有機体の適応形態である。つぎは環境内のある事象が、別の事象とある関係を有する場合である。そして最後は特定の事象が、有機体の行動とある関係を有する場合の適応形態である。

* On the Role of the Learning Theory in Cognitive Rehabilitation for the Disorders of Executive and Memory Functions—From the Point of View of Difficulties of Learning for Familiarity, Predictability, and Controllability.

1) 浦和短期大学福祉科

